

建築再読の旅

■新聞に「行為としての建築」というタイトルで連載されたものです。

(中日新聞文化欄 30 回ほど・新聞連載なので読みやすいです。)

序文、建築そのものよりも建築の奥におぼろげに立ち現れる人間をみたかった、とあるように建築行為の原動力・原意志となった施主もしくはその時代の人々をとらえています。

巨石構築物からピラミッド、石窟寺院、パルテノン、古寺巡礼、伊勢、
タージマハールから安土城、万里の長城、金閣銀閣、香港・・・。

■破壊狂から「建設狂時代」があった

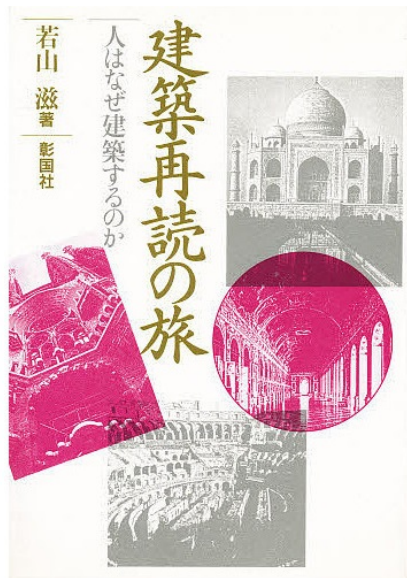
①聖徳太子没後（622）～壬申の乱（672）～全国国分寺・国分尼寺（741）

(飛鳥宮→離波宮→近江宮→浄御原宮→藤原宮→平城宮→平安宮)

②戦国から安土桃山文化（城郭建築）～江戸初期（仏教建築）

③明治維新から日露戦争まで ④大二次大戦後から高度成長

(西洋では古代ローマ、ゴシックカテドラル (11-14 世紀)、ルネサンス)



■副題のつけ方も上手で、各項目どれも読み易くて、おもしろくて、色々な気付きがあります。

❖ ガウディー—巨大な幼児の遊技

機能的なプラン、逆さづくりの安定構造（合理精神）、これを完成させるのは聖ヨハネ、と言いつつ亡くなった。

❖御柱祭—原点を建てる

石を積むときに必要な忍耐と持続のエネルギーでなく、瞬発力。柱を建てること・建築することが祭であった。

❖伊勢神宮—社会の更新儀礼

仏教のように朱や緑で木の永続性を保とうとせずに、個を軽視し、文化を実体ではなく概念で残そうとする。

❖ハトシェプスト女王の葬祭殿—最初の建築家

世界で最も美しい建築のひとつ。大胆な発想と緻密な構成力、繊細な感覚をもった建築家セムト。

❖ タージマホールー女性の仮相としての建築

ひとりの女性に捧げられた美しい建築。砂漠＝オアシス＝都市＝建築＝女性という文化構造か？

❖ 万里の長城—始皇帝の領域記号（重複を含む現存 5000 km）

ジンギスカンはどこまでも拡張しようと草原を駆け抜けた。始皇帝は自分の庭を囲いたかったのである。

❖ ナスカの地上絵—宇宙人へのメッセージ

南ペルー、長さ 60 km 以上・幅 10~15 km。行為の主体、時代、方法すべて不明。度肝を抜く抽象。

❖ 兵馬俑—始皇帝の悲しみ

人類最大の権力者。始めから土に埋もれるために創られた。アクロポリスは高い都市。日本埴輪との文明格差。

❖移動する家—交流の居住様式

ジンギスカン、モンゴル人、アラブ遊牧民、インディアン、ラップ人・・・、国家管理、都市管理の拒否。

■古代人のメッセージを受け止め、人間集団の異様な建築熱を見て、一人の人間の夢と欲望の城に入る。シルクロードで中国の歴史を考え、日本の美学の戦場へ。最後は家と都市と家族の問題です。歴史を巡り地域を辿り、時間と空間を混ぜこぜにして自由に飛びまわる。旅に出るのはあなたです。

(建築へ向かう旅・都市へ向かう旅、に続いて3冊目。世界の建築術一の姉妹編です) 自由貸出可 (黒野晶大)